

栄花物語の表現性についての研究

二宮, 愛理

<https://hdl.handle.net/2324/4474906>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 二宮 愛理
論 文 名 : 栄花物語の表現性についての研究
区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

歴史物語に分類される『栄花物語』の〈文学性〉を考える際、従来の研究では「何を書いているか」という点ばかりが重視されていたように思われる。しかし近年、「語り」や修辞といった「表現」の観点、つまり「どのように書いているか」から考察するという点が注目されるようになった。今後はこうした考察を積み重ねることにより、どのような表現を取ることによって『栄花物語』ができあがっているか、更に演出、脚色の傾向やその狙いなど、どこに文学としての面白さが認められるか、といった点を追究することに、研究の重点が移ると思われる。

本論文もそうした研究の一翼を担うべく、『栄花物語』において、演出や脚色、その他様々な技巧がなされたと思われる部分を具体的に取り上げ、その意図を明らかにすることで、文学作品としての『栄花物語』の特徴について理解を深めることを目的とするものである。

第一章では、巻五「浦々の別」における史実との齟齬について論じた。特に、敦康親王の誕生時期が史実の年次とずれていること、藤原伊周が配流の前に父道隆の墓に詣でていること、女院詮子の病悩を書かないことの三点と、それらと連動して時期が変わっていると思われる伊周兄弟の帰京について注目した。従来は『源氏物語』における光源氏が須磨に下った話と重ね合わせてのオマージュであると考えられていたが、年次が操作された理由はそれだけではなく、『栄花物語』としての伊周像や、構成の問題にも関わっているのではないかということ述べた。

第二章では、正編（巻一～三十）の引歌表現に注目し、これまでの先行研究を整理、統合して数量的な分布を調査した。引歌が多く見られる巻は、内容としては道長家の栄花を賛美するもの、伊周家や顕光家の没落を伝えるもの、疫病などによる社会不安を描くもの、諸行無常を語るものなど、多岐にわたっている。引歌はそれらの内容を印象付けるために文章を飾り、美文調にしていると考えられる。正編の中で引歌の多い巻の内容を追うと、勝者の栄花、敗者の悲哀を語る一方で、最終的に、両者とも同じ「死」による諸行無常を感ずるという流れが浮かび上がってくることを明らかにした。

第三章では、巻八「はつはな」において死去する伊周の遺言に注目し、その前後の構成について論じた。伊周の遺言には、自分の死後、没落した子女たちが女房などに身を落とし、家の恥となるのではという懸念がある。また、遺言の前後に藤原為光の四女の記事が挿入されており、それらはまさしく伊周の懸念する没落した姫の姿であることを指摘した。彼女の描写は伊周の懸念が現実のものとなることの伏線であり、伊周の娘たちも同様に物語の中心から退場していく哀れを描いたものではないかと推察した。

第四章では、前章に引き続き伊周の遺言に注目し、その内容がどのようにして作られたかという点を論じた。「はつはな」の巻には『紫式部日記』を利用した箇所があることが指摘されており、伊周の遺言も同様に他資料の存在が伺えるかという点について、文体の面から検証した。その結果、長大な伊周の台詞には、『源氏物語』の宇治の八宮の遺言や、『栄花物語』巻十五「うたがひ」に見られる道長の独白との類似が見られ、これらとの関連性が意識されて創作されたのではないかとの結論を得た。

第五章では、次の第六章において言及する巻二十六「楚王の夢」の故事に関連して、『源氏物語』「葵」の巻の哀傷表現について論じた。葵の上への哀傷の言葉には、漢詩文による故事が含まれているが、その典拠となった作品は二つあり、「哀傷」の意味はそのうちの一方にのみ含まれていることを確認した。また、「葵」の巻の本文では、その典拠に拠る部分の訓読によって和歌的な哀傷表現を内在させるという工夫がなされているのではないかということ述べた。

第六章では、「楚王の夢」における『源氏物語』へのオマージュについて論じた。道長女嬉子の葬送の日に雨が降ったという史実と齟齬していることは、従来は道長賛美の一環であると考えられてきた。しかし、前章での考察を踏まえると、「楚王の夢」の故事を用いた哀傷表現には「暮雨」の要素が不可欠であり、それを表現するための潤色ではないかということ指摘した。一方、嬉子の夫東宮が見た「雲」は朝の時間帯であることから、これが「朝雲」に当たり、『源氏物語』を踏まえつつ、漢詩文の知識に則った表現がなされていることを明らかにした。

本論文では、特に「史実との齟齬」や「源氏準拠」にヒントを得ているものについて注目し、それぞれの表現で意図されたものについて考察した。今後の課題としては、『源氏物語』以外の作品との影響関係や、続編についての表現性についての研究が挙げられる。また、正編における研究も未だ十分とは言い難く、本論文で注目した観点以外にも、様々な手法とそこに込められた意図があると思われる。それらを積み重ねることが『栄花物語』という作品全体の「文学」としての姿を解明していくことに繋がるだろう。